

(Lonely Night Gathering)

さみしい夜の句会報 第265号 (2026.3.15-2026.3.22)

参加者: クイスケ、七澤銀河、しまねこくん、カオルル、桑原雅、<sup>2026</sup>、蔭一  
郎、気まぐれさん、天然石アケセサリ上<sup>2026</sup>、<sup>2026</sup>、汐田大輝、三明十種  
Nichttraucherchen、雨声、あつみのマルコ、月階柚、石川聡、鈴木正巳、  
ふくろうたかこ、何となく短歌、台風のめ、鯖詰伍太郎、雷(らい)、  
牛田悠貴、もふもふ、石原とつき、大山 昂子、田中美轟角、織田奇  
妙丸、織部ゆい、山田真佐明、空野つみき、しろとも、西脇洋貴、宮  
坂葵哲、真白(ましろ)といます、季川詩音、山羊の頭、つきのさ  
かな、江口ちかる、水の眠り、青海波、まじけい、水彩、安藤 蜜豆、  
東こころ、落とし子、月波与生 (四七名)

◆川柳・俳句

石ノ森章太郎でも躁になる クイスケ  
サロメには少し物足りない悪魔 クイスケ  
市役所で脳内バグを削りとる 汐田大輝  
オマール海老になるまでの瞑想 汐田大輝  
フクロウと目が合うたびに鬱っぽい 汐田大輝  
桜貝昨日は常にイエスタデイ しまねこくん  
ヘイジュードラララで蛇は穴を出ず しまねこくん  
風船がはちけてしまふまで宇宙 しまねこくん  
鳥帰るよく鳴る首の骨持つて しまねこくん  
鳥の巣にジョンとレノンと同じ人 しまねこくん  
点Pを置き去りにする Nichttraucherchen  
スローな武士の巻き戻し Nichttraucherchen  
猫には見えぬものを見る Nichttraucherchen  
藤房にまばらな指紋ある午睡 蔭一郎

断崖の一枚譲り鳥帰る 蔭一郎

やわらかき音又の回廊に葦 蔭一郎

口笛の配達にクレソンを足す蔭一郎

たいがいの固定の花へ磁気嵐 蔭一郎

風船は集めた風を売りさばく 蔭一郎

頬白の蝶番から撮り直す 蔭一郎

疑問符を句点に変えながらお辞儀 牛田悠貴

春のあと缺の季節きましたか 牛田悠貴

数の子の味知りたがるマダムの眼 山田真佐明

とろろ吸うマダムの口で嘘をつく 山田真佐明

尻濡れてからが楽しき潮干狩り 鈴木正巳

君の手を握りたかった春一番 水彩

くじらの春は見えない足の裏のこと 石原とつき

青空を一反脇に差してゆく 江口ちかる。

透明な靴が並んでいる (雲の不死) 空野つみき

傷を撫でれば眠くなる ふくろうたかこ

\*

川柳を枕に眠る月斗忌や まどけい

花びらは次の春へと飛び去った 七澤銀河

春分の日の日溜りに鼓草 カオルル

逢魔が時は朝夕七歩の刹那に顕れ 桑原雑

沈丁花普通じゃ無いと気付いた日 Beato

しゃっくりが止まらない時刻は心時過ぎ 気まぐれさん

悪口 モスキート音 天然石アクセサリー Beato's

賞歴の足せぬ余白や鬱金香 三明十種

どうなってもどうあってもどーなつつ 石川聡

呆れた事のある腹を空かせている 雷

蛭烏賊喰めば己も発光体 もふもふ

カリメロのまんだらからろうじて蒲田 石原とつき

春驟雨人の弱さを数へをり 田中美蟲角

参ったね身を焼くほのほ眠れぬ夜 織田奇妙丸

嫌いだよ そんな姿の君なんて 織部ゆい

うららかと言いい切れなくて閉じる蓋 しろとも

この吸殻が先の中島みゆき 西脇祥貴

粒あんをお願ひします桜餅 宮坂変哲

春雷や病臥の瞼少し揺れ 真白

抗米のその先にある春の野か 季川詩音

安っぽい売り方をして春の恋 東こころ

\*

心音を消すためだけに飼う小鳥 月波与生

### ◆ 短歌

菜の花が八百屋に並んでわたくしの草食獣が目を見まして  
く 水の眠り

古着屋の匂いに似てる恋だった 誰かの体温まだ抜けきら  
ず あづみのマルコ

許してねもう会わないと決めたこと人魚なりに海に行く  
こと つきのさかな

\*

ただ歴史の事実として残る残雪 あなたがどこで、どんな  
人でも 雨声

風船を元手に歩きはじめたら色々な色の世界をくれた 月  
階柚

春 そこに冷たい風が吹こうとも ここまで歩んだ道は確  
かに 何となく短歌

ビキニから花のあふれてくる夜の地球はかるくカラコロと  
鳴る 台風のめ

運命を作り続ける器官が 吾の肉で動く 人並みの嗤笑 鯖  
詰 佐太郎

この四方エントロピーが高いから遅延もすれば渋滞もする

大山 晶子

片隅でひっそり眠ったあたためた冷たい金を売っぱらうお  
う 山羊の頭

◆詩・短文

遠くへ行くために旅をするのは

私がどこかで私を確かめるために

そっと列車を降りるからです

あの暮れなずみする町の

暗がりに棄てられた

台本を拾い上げるためなのです

それでそこに短い詩を書きこみます（山田真佐明）

◆作品評から

新しいドレミを考えてみました暇で死にそうヴィワメナ  
ポヲタヌ〜♪ 鯖詰伍太郎

〜タモリと遊んでいた頃の山下洋輔が言いそうな台詞で

面白い（君が代を歌うよヴィワメナポヲタヌ〜♪）とかあ

りそう。（月波与生）

春のあと缺の季節きましたか 牛田悠貴

〜雑草が生えてきて、切らなければならなくなった。そ

れはもう缺の季節かもしれません。また、味噌汁などに入

れる七草などを集めてる人もイメーჯしました。（季川詩

音）

雲ひとつなき春雷を挿す花瓶 蔭一郎

「春雷を挿す花瓶」で十分美しいので自分なら上の句はベクトルの違う言葉を選びたいが作者は俯瞰する言葉「雲ひとつなき」を置く。(月波与生)

わたしには青い山から流れます 山田真佐明

「わたしには」のねじくれ具合が面白い。「わたくしは」だとつまらないので「に」。なかなか「に」は使えないとここで使う背徳感。(月波与生)

冥途には誰もいないとつい踊る しもじょう

「つい踊る」が可笑しい。本来人間は踊る生き物なのだけども最近の人間は踊らなくなった。川柳大会も踊りの時間があつていい。(月波与生)

あたためた椅子を分け合う金曜日 クイスケ

「曜日を使う場合必然性を感じられない場合が多いがこの句は金曜日だからこそこの句。分けた方かはたまた分けてもらった方か。(月波与生)

逢魔が時は朝夕七歩の刹那に顛れ 桑原雑

「全部良いです」がとくに好きです(落とし子)

フクロウと目が合うたびに鬱っぽい 汐田大輝

「フクロウと目が合うたびに鬱っぽい」。こつちに飛んでくるのではないか、なにかイタズラをされるのではないかと不安になっている様子が浮かびました。目が合うたびってことは、たまたまではなくて何回も合っている。フクロウもまたこいつかと思っっているのかも。(季川詩音)

尻濡れてからが楽しき潮干狩り 鈴木正巳

「いいな、で、最後は泳いじゃう」(月波与生)